

姫嶋口義

呈上総の諸君

聖人の道、先儒の議論已に尽き、實々確々無復遺蘊、則今更新に述るも贅なり。ただ四書・小學・近思の三書をぐる々々々と讀めば、その中自深意出で他に求るに及ず。然れともその三書とても、ただぐる々々讀む而已にてうか々々としては、睡りながら須磨明石の景を見る如くにて、何遍あるきても争でかその景色を知らんや。されば三書をはっきりと目を慍してみるが肝要なり。そこでこそ昔年我__佐藤先生、講學鞭策の書を著し玉へり。學者衆のぐづつかるるにむちをあて、子むらるる人の耳をひかるる異見なり。然れば四書・近思・小學の三書、いかほど難有結構なる書なればとて、鞭策の心なければ鱸に酔のきかざる如くにて、鯛も鱸も無用の肴となるなり。四書も近思も無用の書となるなり。ただ々々此心をひきたて々々々々、眼をさまして、先輩たちの異見を誠に切身に塩を付る如くにきくか、千々万々實に學ぶと云ものなり。我友如何思召候やと、自家身上に引付け痛く警策すべし。さて、そこに一つの不審あり。世の中にさまざま儒者たちあるに、何れをみても安樂に詩を賦し文を作り、登山歩月、飲酒啜茶てらく々々と樂み、世を渡りくらせとも、とより咎むる人もなく、學者大儒先生と呼はるるに、何をくるしみて山崎一家の學は勵み苦みてほ子ををらるるぞ。かくくるしまるる學は果して何の學ぞや。曰、我學由来有準的。以至聖人之學なり。聖人と云人、日本たへて一人も見へ玉す。神武以来近付に一人もなく、中國とても四五千年の久き、ついにかは出もなければ、どのよふなものと書付てはみせかたく、口に述ては聞せがたし。ただ聖人と云人を目當にしてする學問を眞儒とも云ひ、古への學者とも云ひ、君子儒とも云ひ、道學とも云ひ、經學とも云ひ、爲己之學とも云ひ、他処からは宋儒とも呼ぶ。皆是我黨學脈心法、聖門の旨訣なり。ただその道學と云目當なければ、向きに所謂先輩の異見も、講學之鞭策も、亦無用の異見、無用の鞭策とぞなるなり。そこでこそ、亦我__佐藤先生、道學標的の書を著し、學問の目あてここなりとて、長言なしに孔曾思孟周程張朱の八人を出し、これを我輩の目當にそされければ、吾人この一書にをいてはぬく事もならず、さす事もならず、たす事もなければへらす事もならず、全然當拜讀之。

【語釈】

- ・我學由来有準的。以至聖人之學なり…我が學の由りて來たる準的有り。以て聖人に至るの學なり。
- ・全然當拜讀之…全然として當に之を拜讀すべし。

因告諸公曰、我日東始生我山崎先生、尋有佐藤淺見三宅三先生之出、道學明于世亦不少矣。我大人迂齋先生受業於佐藤先生之門、講學有年。是以僕自幼學于膝下、成童入石原先生之門、受父師之教、以講書說經爲己業。僕至愚卑陋、豈得受其高諭乎。然今稍知理道之可尚、而以此道爲念。誠教之使然也、何幸耶。僕蒙不鄙、爲鵜澤生所延啓行到于茲。諸公誤爲僕設講席、日使某講解、孜々不怠。其勵學之厚、轉足疆人意矣。某先月十九日離膝下出家。及時與大人期。至茲則講道學標的、以示道要。於是先期一日、十八日也。請大人書孔曾思孟周程張朱之文字。大人嘉納之、輒書其語各一凡八道、以從某請。乃捧出。某初意將以爲、上総諸生爲學、權輿酒井先生、盛和田老大兄、自是諸生漸次立志、深信吾大人、不廢業、不拒教、乃至今日也。而隨從大人、其直指面命者茲八人矣。姫嶋鈴木氏、折戸鈴木氏、片貝布留川氏、成東安井氏、早船平山氏、小松安井氏、清名鵜澤氏、東金大木氏。到此則趣姫嶋學舍、講標的書、及講畢、以大人墨跡八道各一贈八子。不圖、姫嶋老兄家禍如此。於是不得八子同集會姫嶋、而日々與一二之友人憂負初心而已。十一月朔行東金、二日反清名村、與友人期明三日啓行歸江府。及企行裝、徒然將持墨跡空歸郷。雖然吾何慊哉。因與鵜沢氏謀實前約、輒作講義一小冊、充面會、以欲歸後煩小童生各與其家。便妄綴數言、以易石尤風云爾。

寶曆壬申十一月二日 稻葉亦三郎操筆於清名村旅館。

【読み】

因りて諸公に告げて曰く、我が日東始めて我が山崎先生を生じ、尋[つ]いで佐藤淺見三宅の三先生の出ずる有りて、道學の世に明らかなること亦少しからず。我が大人迂齋先生、業を佐藤先生の門に受け、學を講じて年有り。是を以て僕、幼より膝下に学び、成童にて石原先生の門に入り、父師の教えを受け、書を講じ經を説くを以て己が業と爲す。僕、至愚卑陋、豈其の高諭を受くるを得んや。然るに今少々理道の尚ぶ可きを知りて、此の道を以て念と爲す。誠に教えの然らしむる、何ぞ幸なるや。僕、不鄙を蒙り、鵜澤生の爲に延[まね]かれ行を啓きて茲に到る。諸公誤ちて僕が爲に講席を設け、日々に某をして講解せしめ、孜々として怠らず。其の學を勵むの厚き、轉[うた]た人意を疆くするに足る。某先月十九日膝下を離れ家を出ず。時に及びて大人と期す。茲に至らば則ち道學標的を講じ、以て道要を示さん、と。是に於て期に先んずる一日、十八日なり。大人に孔曾思孟周程張朱の文字を書するを請う。大人之を嘉納し、輒く其の語各々一つ凡そ八道を書し、以て某が請いに従う。乃ち捧じ出ず。某初意將に以爲らく、上総諸生の學

為るや、酒井先生に權輿して、和田老大兄に盛んに、是より諸生漸次志を立て、深く吾が大人を信じ、業を廢てず、教えを拒まず、乃ち今日に至るなり。而るに大人に隨從し、其の直指面命なる者茲に八人なり。姫島の鈴木氏、折戸の鈴木氏、片貝の布留川氏、成東の安井氏、早船の平山氏、小松の安井氏、清名の鶴澤氏、東金の大木氏。此に到らば則ち姫島の學舎に趣き、標的の書を講じ、講畢るに及んで、大人の墨跡八道各々一つを以て八子に贈らん、と。圖らざりき、姫嶋老兄の家の禍此の如くならんとは。是に於て八子同じく姫島に集會することを得ずして、日々一二人の友人と初心に負[そむ]くを憂うるのみ。十一月朔、東金に行き、二日、清名村に反り、友人と明三日行を啓きて江府に歸らんことを期す。行装を企つるに及んで、徒然として將に墨跡を持ち空しく郷に歸らんとす。然りと雖も吾れ何ぞ慊たらんや。因りて鶴澤氏と前約を實にせんことを謀り、輒く講義一小冊を作り、面會に充て、以て歸りて後小童生を煩わして各々其の家に與えんことを欲す。便ち妄に數言を綴り、以て石尤風に易うと爾か云う。

寶曆壬申十一月二日 稲葉亦三郎、筆を清名村の旅館に操る。

【語釈】

- ・石原先生…野田剛齋。名は德勝。七右衛門と称す。江戸の人。本所石原に住む。石原先生。明和5年(1768)2月6日没。年79。佐藤直方門下。三宅尚齋にも学ぶ。
- ・酒井先生…酒井脩敬。一名は義武。竹右衛門、後に九郎右衛門、左平治(左平次)と称す。長島藩の臣。元文年間に没。佐藤直方門下。後に稲葉迂齋に学ぶ。
- ・和田老大兄…和田儀丹。下総酒々井の人。医者。成東町に卜居。寛保4年(1744)1月5日没。稲葉迂齋門下。
- ・姫島鈴木氏…鈴木養察。莊内と称す。成東町姫島の人。安永8年(1779)12月25日没。年85。
- ・折戸鈴木氏…鈴木兵右衛門。松尾町折戸の人。
- ・片貝布留川氏…布留川彌右衛門。九十九里町片貝の人。
- ・成東安井氏…安井武兵衛。成東の人。天明4年(1784)11月15日没。年76。
- ・早船平山氏…平山安左衛門。成東町早船の人。寛政1年(1789)6月12日没。年86。
- ・小松安井氏…安井記齋。名は利恒。字は子久。半十郎と称す。成東町小松の人。享和2年(1802)4月21日没。年78。
- ・清名鶴澤氏…鶴澤近義。幸七郎と称す。鶴澤容齋の次子。大網白里町清名幸谷の人。
- ・東金大木氏…櫻木闇齋。名は千之。初め大木剛中、後に清十郎と称す。東金の人。長崎聖堂教授。文化1年(1804)5月1日没。年80。
- ・石尤風…別れを惜しんで、旅人の行く手を阻む向かい風。
- ・寶曆壬申十一月二日…宝曆2年(1752)11月2日。

孔曾思孟周程張朱語 講義畧

朝聞道夕死可矣

注に不可以不と云字あり。眼を付けてみよ。

金をもたずんはあるべからず、長生をせすんばあるべからず、ずんばあるべからずば色々あり、ただこのすんはあるへからずかない。ここか大事の処なり。逐一姫嶋君にて埒を御明け候へかし。

一夕死はいやな事なり。八十而福来便死矣。これはいやな事なり。朝聞道夕死可矣。なぜに可矣なるぞ。体認してみるべし。

【語釈】

- ・朝聞道夕死可矣…論語里仁篇。「子曰、朝聞道、夕死可矣」。
- ・不可以不…論語里仁篇集註。「程子曰、言人不可以不知道。苟得聞道、雖死可也」。
- ・八十而福来便死矣…八十にして福来たる、便ち死す矣、と。

在明明德在親民在止於至善

佛者は役に立ず、覇者は役に立す、文仲子は役に立す。學問は大学をまなぶ事、大なことなり。大ことはただはならず。可思。さて親の字を程子、當作新。一寸した事なれども、眞儒なり。王陽明か親の字てよいと云は大だわけなり。とこか眞儒ぞや。どこがたわけぞや。自家引受て知るべし。

【語釈】

- ・在明明德在親民在止於至善…大学章句經。「大學之道、在明明德、在親民、在止於至善」。
- ・親の字を程子、當作新…大学章句經集註。「程子曰、親、當作新」。

尊徳性而道問學

徳性を尊ぬから卑し。問學に道ぬから小し。學は高く大なるをよしとす。高大之字、所包廣、可味。卑小之字、千万の気の毒この中にあり。所包廣、可戒。

【語釈】

- ・尊徳性而道問學…中庸章句 27。「君子尊徳性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸。温故而知新、敦厚以崇禮」。
- ・所包廣…包む所廣し。

孟子道性善言必稱堯舜

學問は性善なればこそなる。猿はかしこくてもならぬ。學問の綱領、性善の二字なり。ただ性善ばかり云たとてもいやとは云はれ子とも、俗人共がぜうがこわいから、稱堯舜。然れば堯舜は證文なり。證文さへあれば公事にまけぬ。さて證文には大勢を出すへきに、たた二人ては少きに非すや。直方曰、一匹の猫鼠をとれば、あとの千匹はみなとる。此中有深意。姫嶋丈亘奉頼候。荀楊が大だわけはここをしらぬゆへの事。それに注をする司馬温公、さて々々痛敷事なり。ここになると温公にさへ顔を赤くさせるぞ。我友自重せよ。人柄わるければ一休小僧なり。

【語釈】

- ・孟子道性善言必稱堯舜…孟子滕文公章句上 1。「孟子道性善、言必稱堯・舜」。

聖希天賢希聖士希賢 每讀不覺揚言曰、吁々快哉快哉

天が腰をやすめぬから聖人もやすまぬ。聖人かやすまぬから賢人もやすまぬ。賢人がやすまぬから士はなをやすまぬ。士とは學者なり。儒者なり。めん々々の事なり。俗人は士てなし。そこで、やすむ。

【語釈】

- ・聖希天賢希聖士希賢…近思録為学 1。「濂溪先生曰、聖希天、賢希聖、士希賢」。
- ・每讀不覺揚言曰、吁々快哉快哉…讀む毎に覚え言を揚げて曰く、吁々[ああ]快なるかな快なるかな。

言學便以道為志言人便以聖為志

志に遠慮は入ぬ事。めん々々かふきいても尻ごみをするはいないゆへなり。それかすぐに志のないのなり。志のたんできを云に、奉公するとき、君をそまつにすまいとをもち、女の昏礼するとき、夫を二人もつまいとをもふが志なり。女が夫を二人もとふと云心ならば、だれも女房にはすまいか、學者か聖人になられまいと云をばなぜにゆるすぞ。

【語釈】

- ・言學便以道為志言人便以聖為志…近思録為学 59。「言學便以道為志、言人便以聖為志」。

為天地立心為生民立道為去聖繼絕學為万世開太平

直方云、四つ為の字あれとも、身の為めの一もない、と。正信竊謂、張子の此言ほんなり。迂詐でなし。學者たちきもをつぶさるるな。燕雀何知鴻鵠之心。

【語釈】

- ・為天地立心為生民立道為去聖繼絕學為万世開太平…近思録為学 95。「為天地立心、為生民立道、為去聖繼絕學、為萬世開太平」。
- ・燕雀何知鴻鵠之心…史記陳涉世家。「燕雀安知鴻鵠志」。

致知以明之立志以守之造之以精深充之以光大

正信謂、四者廢其一則非學。

【語釈】

- ・致知以明之立志以守之造之以精深充之以光大…朱子文集 64。「致知以明之、立志以守之。造之以精深、充以光大」。
- ・正信謂、四者廢其一則非學…正信謂う、四者の其の一を廢すれば則ち學に非ず、と。

右段々に而全体肝要のこる処なし。ただこれを体認する事難し。功夫の仕方非他。必有事勿正の五字最妙なり。ふんでふまざれ、活々澆々、中庸と云もこれなり。自然と云もこれなり。知者は知らん。其要在學友集會。

千々万々遺恨なるは姫嶋丈
書不尽言、言不尽意

頓首九拜

二日夜

稲葉正信

呈

姫嶋大兄
折戸丈
布留川氏
平山氏
安井氏
小松生
鵜澤氏
大木氏

【語釈】

- ・必有事勿正…孟子公孫丑章句上 2。「必有事焉而勿正」。
- ・書不尽言、言不尽意…易經繫辭伝上 12。「子曰、書不盡言、言不盡意」。

別幅

孔曾思孟周程張朱之語

八道大人眞蹟。我八子丈各以入大人之門先後立次序、乃宜受納之。其學之進否、徳之高下、或有焉。吾不敢言也。

【読み】

八道は大人の眞蹟なり。我が八子丈、各々大人の門に入るの先後を以て次序を立て、乃ち宜しく之を受納しあるべし。其の學の進否、徳の高下、或は有らん。吾敢えて言わず。

原文：稲葉黙齋先生姫島講義眞蹟書（熱田家所蔵）